

「八面大王伝説」における流布の問題

細川 恒

序

安曇野に残る鬼神退治伝説である「八面大王伝説」は、南安曇郡穂高町大字有明を中心として周辺の市町村に広く伝承されている。また、同伝説にまつわる旧跡は穂高町に多く見られ、その代表的なものとしては考古学でも注目されている魏石鬼窟を挙げることができる。魏石鬼窟は正面の高さ三・六メートル、左右幅七・九メートルという巨岩の下に構築された横穴式石室で、七世紀前半の築造と考えられている。江戸時代までこの古墳は八面大王（魏石鬼）の住処とされていた。

「八面大王伝説」は口碑として民間に伝えられる一方で、地域の神社縁起の中にも書きとめられてきた。そして口碑や文献に残された「八面大王伝説」の多くは、坂上田村麻呂が有明山の鬼賊を退治したという形を取っている。では、この伝説は実際に田村麻呂の史実を何らかの形で反映したものと考えてよいのであろうか。

私は小稿で、日本各地に分布する坂上田村麻呂伝説の特徴を考察することによって、信濃の田村麻呂伝説の一つと考えられている「八面大王伝説」が田村麻呂の史実に基づかない伝説であることを明らかにしたいと思う。そしてさらに、安曇野における農耕の原始開発にもなつてこの地域に生成した鬼伝説が周辺地域に広く流布し、現在の「八面大王伝説」にまで成長していく過程にあつて、在地の真言密教系の宗教者たちが大きな役割を果たしたことを論じたいと思う。

坂上田村麻呂伝説の付会について

現在の安曇野に伝承されている「八面大王伝説」は鬼伝説・坂上田村麻呂伝説・動物報恩譚（鳥女房）の三要素から構成されている。しかし、これらの要素のうち同伝説の中核的要素であるかのように見える動物報恩譚の要素は、明治以降になつて児童文学者を中心に取り上げられるようになったもので、本来

の「八面大王伝説」にはなかつた要素といつてよい。また、坂上田村麻呂伝説の要素も江戸時代に入つてから鬼伝説に付会されて、『信府統記』（享保九年・一七二四年）で初めて文献上に現れたものであると私は考える。この点については別稿で詳しく立証したい。よつてここでは「八面大王伝説」が「信府統記」以降の伝承の形とは異なり、坂上田村麻呂の史実を反映した伝説ではないことを確かめておく。

では、具体的な検証を始める前に、まず田村麻呂伝説についてその特徴を整理してみる。『日本伝奇伝説大事典』（昭和六十一年 角川書店）によつて「坂上田村麻呂」の項を引くとおもに次のような指摘がある。

一般に、田村麻呂に関する伝説は「征討話」と「寺院建立話」とに大別される。そのうち「征討話」は田村麻呂が行つた東国征討にかかわるものであり、もつとも早い時期の文献では「吾妻鏡」（鎌倉末期成立）の文治五年（一一八九年）九月二十八日の条が見られる。ここには、田村麻呂と後代の藤原利仁などが田谷窟（たつこくのいわや）の賊主である悪路王や赤頭を封じこめたことが載っている。また、『元享釈書』（元享二年・一三二二年）の巻九「延鎮伝」には駿河の清見関まで攻め上つた高丸を田村麻呂が討つたとあるし、南北朝時代の縁起集「神道集」巻四の「信濃国鎮守諏訪大明神秋山祭事」や諏訪社最古の縁起である室町時代の「諏訪大明神画詞」には、諏訪大明神

の助力によつて田村麻呂が蝦夷酋長の高丸を平定したことが記されている。さらに、東北地方の田村伝承である奥浄瑠璃の『三代田村』やお伽草子の『田村草子』にいたつては、立烏帽子・高丸・大だけ丸などの多彩な鬼神が登場し、征討の地域も奥州から都に近い鈴鹿山や近江国にまで拡大している。そこには史実を大きく踏み越えた伝説化の跡がうかがわれる。

この指摘を少し補足すると、田村麻呂による東国征討とは、延暦十年（七九一年）に彼が征東副使となつて以来、同十六年（七九七年）に征東大將軍に任命され、同二十一年（八〇二年）に蝦夷（エミシ）の首長であるアテルイやモレを降伏させるに至る東北地方における蝦夷征伐を指している。よつて、「征討話」は本来この史実にのつとつた蝦夷征伐の形をとつていたはずである。しかし、それらは次第に伝説化し、蝦夷征伐とは直接関係のない鬼神退治の話へと変容していった。

一方、田村麻呂による征討の史実がもともと存在しない地域にあつては、従来からその地に伝承されていた鬼神退治伝説に田村麻呂伝説が付会されることによつて、新たな征討伝説を生み出すにいたることもあつたと思われる。そして、そういった伝説の成長にともなつて、田村麻呂伝説は分布範囲を拡大したのである。

田村麻呂伝説のもう一つの特徴として挙げられる「寺院（神社）建立話」について、『日本伝奇伝説大事典』は、それが二種

の『清水寺縁起』や『今昔物語集』巻十一第三十二の話、『扶桑略記』の延暦十七年七月二日の条などに見られる清水寺建立伝承を核としたものであり、観音堂や毘沙門堂、神社の建立にかかわる話が多いことを指摘している。そして、「征討話」と観音信仰を積極的に結びつけて広めたものに、東北地方を巡り歩いた清水寺の勧進聖の存在があったことを指摘しているのである。

この点について、人物叢書 高橋 崇『坂上田村麻呂 新稿版』（昭和六十一年 吉川弘文館）の中で高橋氏は、

「神社建立にまつわる伝説」には、観音堂が多出する。他に、神社や毘沙門堂も目立つ。こういった寺社建立伝説の広範囲にわたる伝播については、宗教者の活動が大きく関わっていると考えられる。

とし、その流布の背景を、

とくに寺院の場合では清水寺のことを考えなければならぬのではないか。とりわけ観音堂が多く、『延暦十七年』とか『大同二年』とかの年代は、前述したように（筆者注 清水寺の建立年を「延暦十七年」または「大同二年」とする伝承があることを指す）清水寺にこそ意味のある年代

であったが、ここに源が存するのであろう。『田村三代記』のとき浄瑠璃すなわち口誦文芸としての流布、これに伴って観音信仰なども土着し、これらの総合として田村麻呂建立と称する観音堂が生まれてきたのであろう。神社にしても、毘沙門堂にしても、おなじような事情によって成立してきたに相違あるまい。伝説の分布が東北地方に広くおよんでいるところから考えれば、浄瑠璃を語り歩くことを生業としたものがいたのであろうし、また、清水寺系統の僧徒によつて、あるいは、東北には慈覚大師円仁の開山と伝わる寺院も多いことからすると、天台宗系統の僧侶によつても、観音信仰や毘沙門堂建立などが広められ、伝説と信仰とが結びついてますます田村麻呂は東北地方の人々の心に根強く住みついてきたのであろう。

と説明している。ここで出てくる慈覚大師円仁は、『奥の細道』などで有名な立石寺などを開いた天台宗山門派の祖である。また、田村麻呂伝説を広めた宗教者について豊田武氏は『英雄と伝説』（昭和五十一年 塙書房）の中で、

ここで考えられるのが、徳一より、清水寺の僧より、もっと教化活動のひろかった慈覚大師の門徒との関係である。

とし、

坂上田村麻呂の平定以後、政府は奥羽の各地に寺院を建てて教化の一方法としたが、その場合、郡衙の付近に毘沙門天を安置して、その鎮守とした。その寺院の建立にも慈覚の門徒の活動が多かったものと思われる。坂上田村麻呂の観音信仰は、慈覚の門流によって各寺院に伝説として植えつけられていったことであろう。

と解している。

この他に田村麻呂伝説の特徴として挙げられるのが、「寺社建立話」の大半が鬼神退治の話に伴うという点である。つまり、「征討話」と「寺社建立話」は一体化されて語られることが多いのである。

以上のことから、東北地方における田村麻呂伝説は、蝦夷の教化を目的とした拓殖事業や布教活動に深くかかわるものであることは間違いないさそうである。ただし、それらの伝説の生成や成長のあり方は、同じ東北地方でも、田村麻呂が実際に征討を行った地域と行わなかった地域とでは当然違いが見られるはずである。

そこで次に、全国に分布する田村麻呂伝説を概観した上で、その中で田村麻呂が直接足を踏み入れたとは考えられない地域

の伝説に焦点を当てて、その特徴を考察する。

田村麻呂伝説の全国的な分布状況を概観するために、ここでは『日本伝説大系』（全十五巻別巻一 昭和五十七年 みずうみ書房）を資料として採用したい。この大系は、全国の主だった伝説を集成した伝説総覧であるが、もとよりこの資料だけでは田村麻呂伝説を網羅できるはずはない。しかし、収録された伝説の数や内容から考えて、現在までに出版されている類書の中では最も信頼できる資料であり、地域ごとの田村麻呂伝説の特徴を知るには十分であると考えられる。

そこで、『日本伝説大系』全十五巻の「例話」、「類話」、「文献」、「参考」に取り上げられた田村麻呂にかかわる伝説をすべて拾い出してみる。ただし、これらの伝説の中には「征討話」、「寺社建立話」のいずれに含めるべきかに迷うものもあるため、次頁に挙げた【表一】の伝説の数には若干の異同も考えられる。また、各伝説の中に「征討話」と「寺社建立話」の両要素を含む場合も多くあるので、「征討話」と「寺社建立話」との合計が「伝説の総数」を上回ることもあることをあらかじめお断りしておく。

なお、表の作り方については、田村麻呂の征討が史実として確認できる岩手県は単独でまとめ、それ以外の県については同じ表の中に示した。

【表一】〔田村麻呂伝説の収録個数〕

A 田村麻呂による征討の史実が存在する地域

県名	伝説の総数	(内) 征討話の要素を持つ伝説数	(内) 寺社建立話の要素を持つ伝説数
岩手	93	42	90

B 田村麻呂による征討の史実が存在しないと思われる地域

県名	伝説の総数	(内) 征討話の要素を持つ伝説数	(内) 寺社建立話の要素を持つ伝説数
秋田	35	32	14
長野	11	9	5
埼玉	39	32	3
千葉	5	1	2
静岡	4	3	2
三重	5	3	3
和歌山	8	8	1

C A・Bの合計

県名	伝説の総数	(内) 征討話の要素を持つ伝説数	(内) 寺社建立話の要素を持つ伝説数
合計	200	130	120

この表を見ると、田村麻呂伝説の分布範囲が東北地方に限らず、千葉、埼玉、長野、静岡、さらには西日本の三重、和歌山の各県にまで及んでいることが分かる。しかし、田村麻呂伝説の大半はやはり東北地方に伝えられており、中でも田村麻呂の活躍の舞台となった岩手県が数の上では圧倒的に多い。また、埼玉県も多くの田村麻呂伝説を持っているように見えるが、これは麦殻を燃やす習俗の由来を説く一つの伝説(田村麻呂の大蛇退治を含む)が伝承地をかえて伝えられているものを詳細に収録してあるためで、他の県のように多様な田村麻呂伝説が存在しているのではない。そこで埼玉県以外で、残されている伝説数が多い岩手県と秋田県の田村麻呂伝説の特徴を見てみる。

まず岩手県においては、田村麻呂伝説のほとんどが「寺社建立話」の要素を持っており、取り上げられた伝説も、地域の神社の創建などを中心に語られたものであることが特徴として挙げられる。一方、「征討話」は全体の半数以下に過ぎない。さらに、退治される対象も悪路王・赤頭・大武丸・高丸・岩盤石・大嶽丸・人首丸など一見多様ではあるが、そのほとんどが東夷とされていることから、岩手県の田村麻呂伝説が田村麻呂による征討の史実を意識して作られたものであることが分かる。田村麻呂の征夷が歴史上の事実であった岩手県においては、田村麻呂伝説は鬼伝説より寺社縁起や地名由来譚と結びつきやすかったと考えられるのである。

これに対して、田村麻呂が侵攻することのなかつた秋田県にも、岩手県のほぼ三分の一に当たる数の田村麻呂伝説が伝承されている。これらの伝説の大半は、「征討話」の要素を持ち、「神社建立話」は全体の半数以下に過ぎない。この特徴は岩手県の場合と好対照をなしており、史実に拘束されることのなかつた地域ほど、田村麻呂伝説と鬼伝説とが接点を持ちやすいという傾向がうかがわれる。

では続いて、信濃に伝承されている田村麻呂伝説が秋田県と同様に、田村麻呂の史実に基づくものではないことを証明したいと思う。

『村に根づいた人々』（木曾・樺川村誌 二 原始・古代・中世 平成六年）の中で郷道哲章氏は、信濃国内の田村麻呂伝承地について次のように記している。

信濃国内の田村麻呂伝承地は七〇ちかく知られているが、そのほとんどが蝦夷征討の往復に立ち寄ったとするものである。そして、これらの伝承は田村麻呂が蝦夷征討のさい、東山道をとおり信濃を通過していったことの反映とみると、延暦年中とするものと、大同年中とするものがほぼ半々となっており、蝦夷征討事業が中止となったのちの大同年中のもの、事実の反映とはうけとれない。

また、信濃国内の伝承地の分布は大きくわけて二つになる。一つは北佐久郡の望月町の福王寺から千曲川下流域にのび、新潟県の信濃川流域にひろがる分布圏である。そしてもう一つは、穂高地方の八面大王と田村麻呂にかかわる伝承地から周辺にひろがるものである。この分布は、北は大町市から上水内郡鬼無里村までのび、諏訪郡は富士見町落合の真福寺、伊那谷は上伊那郡箕輪町上古田の正全寺、そして木曾谷は、賈川の観音寺および平沢の諏訪神社とどまつているということができる。つまり、信濃の田村麻呂伝承は、田村麻呂が蝦夷征討のさい、東山道を利用したとするならば、通過したであろう地点にはない。具体的には神坂峠付近や碓氷峠付近である。ここからも、田村麻呂伝承が蝦夷征討のさいの事実の反映とは考えられない。

郷道氏は、古代信濃の交通の要衝であつた神坂峠や碓氷峠付近に田村麻呂伝承が存在していないという事実から、信濃の田村麻呂伝承は史実に基づいたものでないと結論される。さらに続けて、郷道氏は次のように言う。

では、田村麻呂伝承がひろまつた理由はどこにあつたのであろうか。賈川の観音寺の本尊は木造十一面観音であるが、田村麻呂創建伝承は十一面観音とともにある例がおお

い。蝦夷征討事業が中止された延暦二十四年（八〇五）、

田村麻呂は京に清水寺を建立した。清水寺は十一面観音を本尊とし、観音信仰の隆盛とともに貴族・庶民の信仰をあつめた。

観音信仰とは、観音菩薩にたいする信仰のことである。観音菩薩は慈悲をあたえ、そして災いをのぞき、福をもたらす菩薩として信仰されていた。また、この菩薩は六種類ないしは七種類に変化して人々を救うと考えられており、十一面観音もその一つであった。平安時代のなかば以降、末法思想があらわれてくるようになると、来世を救済してくれる菩薩として信仰がたかまり、『今昔物語集』などの説話集に、観音の慈悲により救済されたという靈験譚がしるされるようになった。そして、聖（ヒジリ）とよばれる民間仏教の布教者の活躍もあつて、院政期ころから全国各地に観音の靈場が生まれた。清水寺はその観音信仰の頂点にあつた。各地の観音靈場に田村麻呂伝説がのこつた理由は、そのあたりにあつたのであろう。

なお、観音信仰は平安時代から江戸時代にいたるまで盛況をしめした信仰であり、観音寺の創建が田村麻呂伝承のとおりであるかどうかは不明である。また、七観音のうち観音寺の本尊である十一面観音は、山や水源の信仰とむすびつけられた観音といわれるので、そのあたりが観音寺の

草創を考える鍵になるかもしれない。

氏は田村麻呂伝承の流布に關して、田村麻呂伝承と観音信仰（特に十一面観音）との關係に注目している。そしてその中心に、清水寺を拠点とした観音信仰の隆盛を想定しているのである。

では今度は、信濃の田村麻呂伝説を『日本伝説大系』から拾つてみよう。同『大系』の中には個数で十一話が採られている。このうちで「征討話」は九話、「寺社建立話」は五話となつてゐる。内容で見ると「八面大王伝説」に含まれるものが九話を占め、他に鬼神退治の話が二話ある。「征討話」の方が「寺社建立話」よりも多いのは、秋田県の田村麻呂伝説が持つていた傾向と共通しており、この点からも「八面大王伝説」をはじめとする信濃の田村麻呂伝説が史実に基づくものでないことが予想できるのである。また先に挙げた郷道氏の観点から考えても、安曇野穂高は東山道筋にはなく、やはり同伝説が坂上田村麻呂征討の史実を反映しているとは考えにくいと結論できるのである。

では信濃における田村麻呂伝説、特にその代表的伝説であり、流布範囲も広い「八面大王伝説」はどのようにして生成、流布したのであろうか。

次に「八面大王伝説」を伝承している寺社に注目して、同伝

説の流布の問題について考えてみる。

「八面大王伝説」を伝承する寺社について

降幡雷淵『新撰仁科記』（明治三十五年）は最も早い時期に「八面大王伝説」についてふれた研究書である。同書の中で雷淵は「附 田村將軍考」と題して、有明山に棲む鬼神について次のように述べている。

信越兩國間には田村將軍の創建と稱する社寺多し、我信濃にては此田村將軍の何人なるかを極めず、妄に之を坂上田村麻呂なりと推断せるが故に、田村麻呂は我信濃の人なるが如き奇観を呈せり、今之を示さん

一、南安曇郡穂高神社由緒、信府統記に因るときは延暦の初年田村利仁義死鬼を退治云々と見え、

二、同郡栗尾山満願寺縁起、善光寺道名所図会による時は延暦十四年坂上田村將軍中房山の賊を退治云々と見え、

三、小県郡泉田村大日堂縁起、長野県統計書によるときは延暦十六年坂上田村麻呂の建立なりと見え、

四、南安曇郡有明村不動堂縁起、同書によるときは延暦二十年坂上田村麻呂の草創なりと見え、

五、北安曇郡平村大澤寺縁起、同書によるときは延暦二十

四年坂上田村麻呂の建立なりと見え、

六、南安曇郡有明村五龍山明王院縁起、幽谷余韻によるときは大同元年坂上田村麻呂有明山の賊を誅し云々と見え、

七、北安曇郡社村源花山盛蓮寺縁起、信府統記によるときは大同四年坂上田村麻呂利仁將軍觀音堂建立云々と見え、

八、東筑摩郡松本町筑摩神社由緒、善光寺道名所図会によるときは、此宮大同中坂上田村麻呂の創立なりと伝ふれども延喜式内に列せざるは不審なりと見えたり。

九、以上の外小県郡高井郡等にもあれど、年代同じきものは煩はしければ略す。

雷淵外史曰く、国史を案するに坂上田村麻呂の時は上に英明なる桓武天皇ありて、延暦二年に私に道場を建て寺堂を造ることを禁ぜられたり。故に田村麻呂畢世中僧延鎮の為に山城に清水寺を建てしかど、朝廷に請ふて官寺となしたり。如此時代に於て田村麻呂が特に信濃に入り、違勅の罪を犯して此多数の寺堂を建てんや。

人或は云ふ。特に信濃に來りしには非ず東夷征討の途次我信濃を経たるに由ると、余は駁して曰はん田村麻呂の東夷征討は延暦十年同廿一年同廿二年の四次なり、前記中之に符合するものは只一つあるのみ、大同中の如き田村麻呂は常に右近衛府にありき、謬妄知るべしと。

又口碑單に田村將軍と伝ふ、然るに之を田村麻呂なりと

判定し、且つ社寺開創の古代なるを粧はんとし、大同四年より延暦の初年に通次上進することこそ笑止なれ。

然らば田村將軍とは何人ぞ云ふに、越後の地誌と他の史伝とによりて平維茂なることを知る。我信濃にも、

一、小県郡別所村安樂寺は維茂の開基なりと諸書に見えて有名なり。

二、更級郡八幡村に八幡宮を勧請せしは維茂なりと神社考に見えて人の知る所なり。

三、東筑摩郡松本町筑摩神社由緒、信府統記に社家口碑を記して有明山の賊を討ちしは雨宮殿と吉田殿との二人にて、八幡宮を勧請して勝利を折りしは吉田殿、社殿を造営して報賽せしは雨宮殿なりとありて、田村將軍の雨宮殿なることを知る。

次に田村將軍は何故に多く寺堂を建てしかと云ふに、往生伝に維茂篤く仏法を信じ法華を練習し僧源信に従ひて法を問ひ年八十にして往生の素懐を遂げしことを記せり。如此信者なるが故に善光寺に近き雨宮に居り信越兩國の守たりし日多く寺堂を國中に建てしものならん。

さて、維茂を何故に田村將軍と云ひしかと云ふに、維茂の伝記に維茂初陸奥の田村郡に居り、州の豪族藤原師任と田を争ひて戦を開き、終に諸任を殺し、かは威名東國に振ひ、人其勇武に服して將軍殿と呼べり、後果して鎮守府將

軍となると見えたり。されば田村の將軍とは維茂が眞の將軍とならざる前の称なり。

尚大日本史維茂伝の註に維茂曾て信濃を經しに、賊の婦人の粧をなして人を誑き殺し、又夜叉の仮面を被ふりて人を嚇し財物を奪ふものあり、維茂撃ちて之を殺すと見ゆ。

此婦人の粧をなしたるは戸隠山の賊なるべく、夜叉の仮面を被ふりたるは有明山の賊なるべし。

雷淵は、坂上田村麻呂討夷の史実と田村麻呂建立とされる寺社の縁起などに記される年代との矛盾を指摘し、ここでいう「將軍」を平維茂のことであると述べている。そして有明山の賊についても、「尚大日本史維茂伝の註に維茂曾て信濃を經しに賊の婦人の粧をなして人を誑き殺し、又夜叉の仮面を被りて人を嚇し財物を奪ふものあり、維茂撃ちて之を殺すと見ゆ。此婦人の粧をなしたるは戸隠山の賊なるべく夜叉の仮面を被ふりたるは有明山の賊なるべし。」と記し、「戸隠山の賊」（筆者注 鬼女紅葉のことか）とともに維茂によつて討伐されたと説く。

このことから、雷淵が「八面大王伝説」の鬼を歴史上実在した夜叉の仮面を被つた賊とし、一方でそれを退治する將軍を平維茂と想定していることが分かる。「田村將軍」が何びとであるかはともかくとして、英雄に退治された有明山の鬼神について雷淵が言及していることは興味深いし、同伝説を伝える寺社名

が見られるのも注目される。

さらにもう一つ資料を挙げるとすると、「八面大王伝説」の初出文献と一般に考えられている『信府統記』・「安曇・筑摩両郡旧俗伝」がある。この資料は『新撰仁科記』を一八〇年近くさかのぼる享保九年（一七二四年）に完成した松本および信濃国の地理と歴史の史料であり、松本藩史としての性格を持っているといつてよい。

同書の中でも、「八面大王伝説」とかかわっていくつかの神社が語られている。

其頃中房山ト云所ニ鬼賊アリテ、国人ノ仇トナリ、神社仏閣ヲ破壊シ、民家ヲ焼亡シ、悩乱セシムルコト年久シ、彼レヲ魏石鬼（或ハ義死鬼トモアリ、）八面大王ト云フ、坂上田村麿是ヲ征伐スト云云、（田村將軍利仁ハ桓武天皇ノ御宇ニアリシ人ニテ、延暦年中東夷ヲ征セラレシコト数度アリ、此時ノ内ナルベシ、但シ信濃國ニ於テ夷賊ヲ平ケラレシコト髓ナル説ハ見サレトモ、当所旧俗ノ云ヒ伝ルニ任セテ爰ニ載ル、今ニ松川与宮城ト云フ所ニ、彼ノ魏石鬼カ窟トテ、四五間四方磐石ニテ疊ミ天井モ大石ナリ、其上ハ山ニテ草木生セリ、此外彼辺山々ニ窟アリ、又矢沢入ノ山中谷合ニ大石ノ角ニ切りタルアリ、長サ二間、幅厚サ一尺四五寸、或ハ一尺八カリニ切タル石数多積ミ重ネテ今ニ

アリ、此谷狭地ニシテ、大勢ノ人夫働クベキ所ニアラス、彼石一ツモ凡ニ三百人ニテモ持難キ大石ナリ、然レハ人力ノ及フコトニアラス、鬼賊ノ事迹ト云ヒ伝フ、）

延暦二十四年田村將軍当國ニ発向、矢原ノ庄ニ下着、中界ト云所ノ城ニ入ル、（今ノ長尾組中萱ト云フ所ノコトニヤ、穂高ノ縁起ニ曰ク、人王四十九代光仁天皇ノ御宇、義死鬼ト云フ東夷神領ヲ掠メ、官社ヲ焼亡シ、万民ヲ悩乱セシムルニ依テ、桓武天皇ノ勅命ニテ、延暦年中、田村利仁東夷追討スト云々、）吉祥ノ地ナレバトテ、川会ニテ、（昔泉小太郎居住ノ地ナリ、）軍兵を揃へ、翌大同元年

（平城天皇ノ元年ナリ、）鬼賊退治アリ、（此時鹿島大明神ニ祈誓アリシ故、大明神示現、直ニ神託アリ、山中騎戦叶フヘカラス、馬ヲハ悉ク籠ニ置ヘキヨシヲ命セラルニ依テ、馬トモ繫キ置ケル所、今ノ駒沢ナリト云フ、）矢沢ト云フ山ノ奥マテ攻登ラル、鬼賊所々ニ戦フトイヘトモ叶ハス、散々ニ逃落テ、爰カシコニテ皆討捕ラル、ナリ、今ノ松川与耳塚ト云フハ、彼夷賊ノ耳ヲ埋メタル塚アル故、村ノ号ニ称ヘ来レリ、又鬼類ノ中ニ野狐ノ変化シタル物ナトモ多カリシ、悉ク追詰メラレテ、本体ヲアラハシ、狐トナレルヲ討取シ所トテ、今ニ狐島ト云フ是ナリ、（穂高組ニアリ、）八面大王ノ社トテ祠モアリシト云フ、一説ニ鬼王ノ首ハ庄内ノ地ニ埋メテ塚魔ト号シ、其上ニ権現ヲ勧請ア

り、今ノ筑摩ノ八幡宮是ナリトカヤ、鬼賊ノ劍八戸放大権
現ニ納メラル、(何レノ所ノ社ニヤ知レズ、)一説ニ鬼族
ノ劍三ツニ折レテ、其柄ハ五竜山ノ滝坪ニ沈ミテ失セヌ、
(五竜山ノ滝ハ宮城ニアリ、)鋒ハ水沢若沢寺ニアリシカ
焼失セリ、央ノ折レ五寸ハカリ栗尾山満願寺ニ今ニアリ、
鉄ニアラズ石ノコトクナル物ニテ鑄アリ、両刃形ノゴトシ、
此外彼鬼賊ノ事跡ナリト云ヒ伝フル所余多アリ、有明ノ里
ヲ仁科ト号セシモ此時ナリ、鬼賊仁ノ科トナリタル義ヲ以
テ、田村麻呂ノ名付ラレシトカヤ、大町組借馬ノ内鹿島村
ト云フ所ノ山ニ、大明神ヲ祭ラレ、宮柱太敷立シトナリ、
社人鹿島神太夫ト云ヒシトカヤ、神領ノ山トシテ、天狗沢
ノ岸ヨリたいら川辺マテノ中ニテ、木ヲ伐社鳥居等建立ト
(云云)、又放光寺観音堂・若沢寺観音堂、田村麻呂ノ建
立ナリ、是東夷征伐ノ折願ニ依テナリ、將軍逗留ノ間ニ、
当郡三年ノ貢ヲ赦サル、是レ人民彼賊ノタメニ惱マサレテ
困窮セル故ナリ、此厚恩ニ、国人等將軍武運長久ノ祈禱ト
シテ、神社仏閣ヲ所々ニ建立シテ、田村麻呂ノ建立ト札ヲ
書キ納メケルトナリ、今ニ至テ当地ニ田村ノ建立ニテ開起
セリト云ヒ伝ル寺社多キコトハ此所謂ナリ、將軍都ニ上リ
給フ時、跡ニ等々力玄蕃允ト云フ者ヲ残シ置ケルトナリ、
凡高根伊勢守ヨリ十七代、其内都ヨリ下向ノ国司清原氏ノ
人二代六年治メラル、此レヨリ後百二十年余、国司交替知

レズ、

この二書以外にも江戸時代の地誌や街道記の中に「八面大王
伝説」を伝える文献がある。それらも簡単に紹介しておく。

まず、「信府統記」よりも約九〇年下つた文化十三年(一八
一六年)に書かれた滑稽本『続膝栗毛八編』(十返舎一九)で
ある。これはいわゆる地誌や街道記とは少々趣の異なつた作品
であると言える。『続膝栗毛八編』はベストセラーとなつた
『東海道中膝栗毛』の続編である『続膝栗毛』シリーズの一編
で、松本から大町への糸魚川街道に沿つた道中を紀行文風に綴つ
たものである。一九はこの本の執筆のために文化十一年(一八
一四年)に当地を実際に踏査しており、『続膝栗毛七編』巻末
の予告の中でも、「近頃越後の糸魚川街道とて、松本より成相
新田それより保高池田大町新町などと続きたる道至而めづらし
き絶景の地あまたありて近来此街道往来する旅人多きよし殊に
その順道に栗尾山観音(成相新田より二里いたつての霊地なり)
松尾寺薬師(栗尾より一里半)宮城不動(松尾より半道此あた
りに小岩だけといへる古戦場又鬼のすみたまへるといふ岩穴い
くつも、往來に見えたり有明山といふ名山へもちかし)」など
と記している。

この他に佐久郡白田の神官井出日向守道貞によつて原著され、
孫の通によつて補筆されて世に出た信濃の名勝・古跡などに関

する書である「信濃奇勝録」（執筆は天保五年・一八三四年、出版は明治十九年・一八八六年）や尾張の豊田伊右衛門利忠によつて書かれた善光寺道及び北国街道近隣の名所・古跡・神社・仏閣などの記録である「善光寺道名所図会」（天保十四年・一八四三年）にも、同伝説にまつわる名所として栗尾山満願寺、宮城五龍山明王院（宮城不動）などが紹介されている。

こういった文献に登場したものはもちろん、それら以外で現在にまで「八面大王伝説」を伝承している寺院を拾い出してみると「表2」のようになる。

この表を見て分かるのは「八面大王伝説」を伝承してきた寺院の宗派の多くが真言宗であり、「信濃高野」と呼ばれた栗尾山満願寺や「信濃日光」と呼ばれた慈眼山若沢寺など、地域の古刹が名を連ねていることである。中には大沢寺のように曹洞宗の寺院に同伝説が残ることもあるが、大町の「八面大王伝説」は江戸時代後期に大沢寺の僧侶であった実岩仙丈によつて穂高町の伝説を模して作られたらしいことが分かっている。こういった例外を除けば「八面大王伝説」が真言宗の寺院を中心に伝承されてきたことは事実と言えそうである。また、これらの真言宗の寺院の多くが千手観音や十一面観音を本尊としていることから、同伝説の流布の背景に観音信仰の信濃への浸透があったことが察せられる。観音信仰は元来、現世利的色彩を色濃く持っているが、それゆえに靈験譚も

【表2】（穂高町周辺で田村麻呂伝説（八面大王伝説）を伝承している寺院）

寺院名	所在地	宗派	本尊	備考
正福寺	穂高町	真言宗	不動明王	旧・明王院高山寺
満願寺	穂高町	真言宗	千手観音	
（廃）若澤寺	波田町	真言宗	千手観音	
清水寺	波田町	真言宗	千手観音	きよみずでら
真光寺	梓川村	真言宗	阿弥陀如来	
見性寺	山形村	浄土宗	阿弥陀如来	
放光寺	松本市	創建時は真言宗	十一面観音	現在は曹洞宗
大澤寺	大町市	曹洞宗	准提観音座像	
盛蓮寺	大町市	真言宗	不動明王	

多い。

そもそも真言密教の信濃への流布は平安時代の初期に早くも認められ、鎌倉時代、室町時代を通して弘法大師への思慕と高野山信仰といった形で民間に広まっていた。また、それと並行して、もともと各地に育っていた自然崇拜の山岳信仰や地付きの神の信仰は真言（又は天台）密教の中に取り込まれ、修験道へと姿を変えらることとなる。この実例としては『梁塵秘抄』に出てくる戸隠山が挙げられるが、比叡山延暦寺の末寺であった戸隠山顕光寺は平安時代末にはすでに全国的な修験道場となっていたのである。

戸隠山以外で、古くから修験の地として知られていた山に、ともに「八面大王伝説」の伝承地である南安曇郡穂高町の有明山や蔵王権現を祀る松本市牛伏寺のある鉢伏山がある。この二山は水分の霊場として信仰されてきたという共通点を持っている。特に鉢伏山は先に引用した文献にも出てきた筑摩神社と関わりが深く、伝承としては『信州築魔八幡宮演儀』に「八面大王伝説」を残している。

『信州築魔八幡宮演儀』の成立時期及び同書における「八面大王伝説」について、信州大学教育学部助教牛山佳幸先生（日本宗教史）がご教示くださった点をご紹介する。以下は、筆者が先生のご指摘を要約したものである。

（牛山先生のご見解）

『信州築魔八幡宮演儀』を『安筑資料叢書』第四輯（松本中央図書館蔵）の書目解題に記されたように「永正年間」（一五〇四〜二一年）の成立とすることに疑問を感じるが、『信府統記』中の本文と『信州築魔八幡宮演儀』本文との類似（筆者が指摘済み）から、同書が『信府統記』を遡る内容を伝えていることは確かだといつてよいであろう。また、『信州築魔八幡宮演儀』冒頭に「大日本国中山道信濃国十二郡の内両郡は満々としたる海なり、」とあるが、もともと信濃は十郡とされており、それが十二郡と記された初出は戸隠神社願文（永禄元年・一五五八年）であることから、戦国時代頃の話であるかもしれない。

また、『信州築魔八幡宮演儀』に描かれる伝説の生成について考えるとき、文中に出てくる「八大魔王」などに見て取れる治水伝説の要素がヒントになる。現在でも「魔王」という地名は修験者が治水にかかわる祈禱を行った場所に残されており、この話の成立に信濃の在地の修験者がかかわった可能性が考えられる。伝説の舞台となつている有明山も鉢伏山も修験者の入り込んだ山であり、戦国時代以降、地域の治水における祈禱などを通じて修験者が民衆と深くかかわつてくることから、この時期に治水伝説の一つとして、『信州築魔八幡宮演儀』の

「八面大王伝説」が生成してきたのではないかと想像される。なお、江戸時代に入ると、修験道は神社と切り離されるようになるので、やはり、『信州築摩八幡宮演儀』はそれ以前に成立していたと考えた方がよからう。

牛山先生がご指摘になられた『信州築摩八幡宮演儀』における「八面大王伝説」と修験との関連に焦点を当てて同伝説を考えると、まず、その舞台となつている鉢伏山や有明山が問題となる。『信濃の山岳信仰』（平成六年 長野市立博物館第三十五回特別展）によると、「中信地方の山岳信仰は、盆地の東に連なる鉢伏山を主峰とする筑摩山地、さらに北信濃に接した筑北地域の山々、そして松本平の西方に屹立する三〇〇〇メートル級の飛騨山脈の山岳とその前山などを中心に展開」している。

中でも鉢伏山は鉢伏山水系（薄川、田川など）の水源として、松本・塩尻・岡谷にまで及ぶ広い範囲で信仰の対象とされ、平安時代中期、松本市内田に建立された牛伏寺を中心に発展した山岳霊場としても有名である。この鉢伏の山頂には、牛伏寺の奥の院として鉢伏権現が祀られているが、『信州築摩八幡宮演儀』では鉢伏権現が満水に苦しむ人々を救うために八郎と姿を変えて現れ、その子である泉ノ小次郎が湖の排水を行つてゐる。また牛伏寺には、平安時代末の一木造りの蔵王権現の立像があるが、この神は修験信仰の本体であり、請雨をつかさどる農耕

神である。また鉢伏山は、古代からの水神信仰を背景に、筑摩神社や須々岐水神社などの古社とも深いかわりを持つてゐる。中でも『信州築摩八幡宮演儀』で創建を説かれる筑摩神社には、その神体として十二体の蛇神が祀られており、雨乞い神事も古くから行われている。

一方、鬼神たちの本拠地として描かれている安曇郡の有明山は、享保年間（一七一六〜三六年）まで山頂への登山はなされなかつたが、信濃富士と呼ばれた美しい山容から、古来信仰の対象とされていた。特に、有明山麓の有明山神社や高山寺（五竜山明王院正福寺）は早くから修験の霊場として知られ、民衆の来訪も多かつた。この高山寺には南北朝時代の不動明王像が残されており、その創設を平安時代にまで遡ることも可能である。

次に『信州築摩八幡宮演儀』の中に出てくる要素から、特徴的と思われる点を指摘してみる。まず、有明の鬼を退治する雨宮殿であるが、同書ではその本地を説いて熊野三社権現の化身としてゐる。熊野は言うまでもなく日本第一の修験道場である。また、鬼神退治に尽力する八大竜王であるが、『古語大辞典』（昭和五十八年 小学館）によれば「仏教語。仏法守護の八体の竜王。」とされ、「水、特に雨をつかさどる。」とある。『金槐和歌集』（建保元年・一二一三年）の雑の部にも、「時により過ぐれば民の嘆きなり八大竜王雨やめ給へ」という歌があり、

八大竜王が雨の神として民衆に受け入れられていたことを感じさせる。さらに雨宮殿とのいくさに破れ、有明の宮城まで逃げる鬼神たちを待ちうけていたものに宮城の不動明王がある。不動明王は密教に習合されてからは大日如来の化身と考えられ、修験者を魔から守護する代表とされてきた。

このように『信州築魔八幡宮演儀』上巻の鬼神退治の部分を概観すると、そこには本地垂迹思想や修験道の影響が顕著である。このことから、「八面大王伝説」の生成に山岳信仰の宗教者がかかわっていたことが十分想像できるのである。

結

以上の考察から私は、「八面大王伝説」が坂上田村麻呂の征討の史実を反映したものではないこと、また同伝説の成長・流布に安曇野を中心に活動した真言密教系の僧侶が深くかかわっていたことを推想するのである。

おそらくこれらの宗教者たちは穂高町に古墳時代から伝えられてきた異族征討の鬼伝説を布教に利用するために、その征討者を坂上田村麻呂に置き換え、寺社の権威付けを図ったのであろう。

もともと山岳信仰の対象であり、地域の治水とも深いかわりを持つ有明山を舞台に生成した鬼伝説は、拓殖事業を背景に

持つ坂上田村麻呂伝説を無理なく吸収し、安曇野の創世を語る壮大な伝説へと成長していったのであろう。地域の原始開発と結びつく要素を持っていたことが、「八面大王伝説」に現代まで伝承され続けるエネルギーを与えたと考えるのである。

(ほそかわ ひさし 松本市立松島中学校教諭)